

がん 集学財団 News

ニュース

TOPICS

一般研究助成事業に クラウドファンディングはじまる



医療機器事業

臨床試験関連事業

一般研究助成事業



5つの事業

研究助成・情報発信・開発支援・交流会など、
様々な方面から、
がん治療の発展に貢献しています。



データベース事業



講座・講演会事業

臨床試験のサポートや研究への助成、医療機器開発、蓄積された研究データの再解析により、新たに得られる情報の発信、意見交換・情報交流の場となる講演会やイベントの実施など、あらゆる方面から、より良いがん治療を推進する事業を行っています。



44号 目次

2021年12月

代表理事就任挨拶	3
会長就任あいさつ 会 長 藤田 讓	3
理事長就任あいさつ 理事長 山岸 久一	3
常務理事就任あいさつ 常務理事 桑野 博行	4
TOPICS 一般研究助成事業にクラウドファンディングはじまる	5
助成者の声 第40回助成者 九州がんセンター呼吸器腫瘍科 医長 庄司 文裕	6
2020年度一般研究助成事業のご報告	7
臨床試験の支援希望の医師・企業様へ	8
現在進行中の臨床試験について	8
東海大学 医学部長 がん集学的治療研究財団 理事 森 正樹 先生	8
学会発表について	10
第58回日本癌治療学会「最優秀演題受賞」 静岡県立静岡がんセンター 大腸外科部長 塩見 明生	11
第58回癌治療学会での発表を終えて 九州がんセンター 消化管外科 中島 雄一郎	11
論文発表について	12
JFMC データベース支援事業	12
医療機器事業	13
市民公開講座を開催しました	14
賛助会員のお誘いとお寄付のお願い	14
ご寄付者・賛助会員様のご紹介	15
公益財団法人がん集学的治療研究財団 役員・評議員・委員名簿	17
Infomation	19
JFMC がんイベント企画	19
事務局インフォメーション	20

代表理事就任挨拶

会長就任あいさつ



会長 藤田 譲
朝日生命保険相互会社
最高顧問

私は、がん集学的治療研究財団が、医学界関係者以外の民間事業人からも理事に加えようと改正がなされた年に、その中の一人として理事に就任して参りましたが、この度の6月22日の理事会で囃らずも山岸会長の後任として推挙され、会長職をお受けすることになりました。

本財団は、1980年に厚生労働省医政局所管の財団法人として設立され、爾来、財団の事業

として、革新的がん予防、診断、治療法の開発等に取り組んでこれ、がん医療の進展に多大な貢献をしてきており、その歴史と伝統ある財団の会長職を拝命したことに、今更ながら改めて、責任の重さを痛感しております。大学は文系出身で、もとより医学のことには全くの素人であり、専門的な事は全く分かりませんが、お引き受けした以上は、逆に門外漢の民間実業人としての視点を生かして、健全かつ透明性の高い、そして、コンプライアンスを重んじた本財団の運営に、微力ながら尽力して参りたい所存であります。山岸理事長、桑野常務理事はじめ各理事や監事の先生方、また事務局の皆さまのご支援とご指導を心よりお願い申し上げます。

これ迄理事を務めながら気掛かりに思っておりましたことは、本財団の財務状態が窮屈になってきている点があります。これは近年生じた臨床試験結果改ざんの事件の影響で、臨床試験に向き合う製薬会社の態度が消極的になったことが背景にはありましょう。本財団は公益法人であり、収益性を目指す必要性はありませんが、事業運営上の諸経費や事業拡大のための必要な財源が不足しては、財団運営そのものが成り立たなくなります。こうした事態に対応すべく既に新規事業として、データベース事業や医療機器事業に進出しており、これからの進展が期待される分野であります。

こうした新規事業が軌道に乗るにはまだ時間が掛かることも予想されますし、また寄付金等は一時的ならとも角、継続的に募ることはなかなか難しい時世であることも考え合せますと、本財団の事業運営に当たって、短期的と中・長期的にどんな対策、対応が可能で必要であるかを模索し、次のステージに向けてのビジョン、プランを策定すべき時期に来ているのではないかと思います。「云うは易く、行うは難し」

ではありますが、山岸理事長の下に理事会が力を合わせて、事務局も英知を結集して対処していけば、道は開けるものと確信します。

歴史と伝統と実績があり、加えて全国的に幾多の医学関係者のネットワークが構築されている本財団の貴重な無形の財産は、大切に継続して、末永く国民の生命を守り、社会に貢献し続ける財団であり続けることも、人生100年時代を迎えようとする今だからこそ、私達に求められている責務ではないかと考えます。

結びにあたり、健全で透明性ある組織運営を行っていく上で、評議員、理事、監事、および各種委員会委員の皆様のご支援とご協力を重ねて心よりお願い申し上げます、会長就任のご挨拶とさせていただきます。

理事長就任あいさつ



理事長 山岸 久一
京都市立医科大学名誉教授

2021年6月22日の評議員会、理事会において、理事長として就任致しました。

前任の松本晃理事長は、体調を崩され一期のみの就任で退任されました為、急に理事長交代となりました事をご理解頂きたく存じます。

公益財団法人として、最も重要なことは、「透明性の維持」と「公益性の確保」であります。

財団組織を維持し、公益性のある事業の実現の為の収益は必要であります、それ以上の収益の取得は許されません。

過去の財団運営では、製薬関連の企業からの支援を中心に運営されてきましたが、臨床研究法が施行されて以来、製薬企業からの支援が困難になってきております。

その中で、患者の為になる治療法の開発・研究を推進するには、薬剤治療のみでなく、副作用対策、手術機器・手術方式の工夫、術後の再発予防対策、患者側から医療従事者に対する提言、あるいは先進医療の推進など様々な方向性を追求したいと思います。

公益財団として事業そのものから利益を得ずに、事業に必要な財源を得るためには、

- 1) 公的研究費の取得
- 2) 寄付のお願い(公益財団法人の特徴を活かして)

3) 関連企業からの支援

4) がん関連興業、がん患者支援など

事務局の企画力、各種委員会からの積極的なご提案、ご協力を宜しくお願い致します。

結びに、今までと同様に皆様から当財団へのご支援とご理解を賜りたくお願い申し上げます。

常務理事就任あいさつ



常務理事 桑野 博行
地方独立行政法人
福岡市立病院機構
福岡市民病院 院長

歴史と伝統のある、そして我が国のがんの臨床と研究さらに教育・啓蒙に多大なる貢献を重ねてきた、「公益財団法人 がん集学的治療研究財団」の理事、ならびに常務理事を、令和3年6月の理事会において、引き続き拝命致しました。

わが国の臨床研究の置かれた状況も必ずしも楽観視できない社会環境が続く中、松本晃前理事長、並びに山岸久一前会長のご尽力とご貢献にここで改

めて、心から敬意と感謝申し上げます。また、今回新たに理事長として引き続きご指導いただく山岸久一先生および新会長にご就任いただきました藤田譲先生のリーダーシップのもとに、監事の先生方のご教示を賜りながら、理事、評議員そして事務職員の皆様とともに、当財団の更なる発展と、公益財団法人としての社会的使命を真摯に考えながら、我が国のがん医療とがん研究の推進をとおして医学界さらには社会への更なる貢献を目指してまいりたいと、心を新たに致しております。

さて、前述いたしました厳しい客観情勢の中、この度の新規の体制のもとに、当財団が従来から取り組んでまいりました様々な対応策を引き続き前に進めるとともに、新たな試みも模索しつつ事業を推進してまいります。臨床研究に対しては、平成29年4月7日に成立し、平成30年4月1日から施行された、「臨床研究法」の下に、ルールに則った、より厳密かつ丁寧な運用と管理が求められ、国民の信頼に資する臨床研究を展開する重要性がさらに増してまいりました。当財団としても、「がん臨床研究」の我が国における先端をゆく公的専門組織として、さまざまな臨床研究の推進を図るとともに、臨床研究における、IRB 事業などをはじめとしたノ

ウハウを提供してゆくことも使命と考えております。

そのような現況の下、私ども財団として、以下のことがらなどを見据えた事業を展開することが重要ではないかと考えております。

まずは当然ながら、当財団のメインの事業である、公益活動としての臨床研究の推進であります。様々の制約の厳しい中で、より質の高い、また実効性のある、そして何より、がんの集学的治療の進歩にきわめて有用で、患者さんにその恩恵をもたらすような、研究の展開が、今までも夥しい数の素晴らしい成果が成し遂げられては来ましたが、さらにその内容が問われることとなり、それにこたえるべき事業の推進が求められます。そのためには、医師主導臨床試験を実施するためのプロトコルの作成と遂行ができる資質に富んだ医師の参画と、その育成を図る必要があります。そして、当財団における、臨床研究開発・推進委員会の更なる活性化とその活用を図ってまいることが重要と思えます。

次に、データベース事業の推進であります。現在はまさに「ビッグデータ」の時代ともいえ、医学の世界においても様々の領域で展開されております。がんの領域においても、各施設が遂行している治療のデータを、最近急増している高齢者やさまざまな合併疾患を有することで臨床試験に登録が困難な患者さんも含めた、「リアルワールド」の貴重なデータをきめ細やかに集積、解析することによって、きわめて有用な質の高いエビデンスが得られる可能性があります。幸い、当財団には今日まで多くの方々の並々ならぬご努力に基づいた、膨大なデータの蓄積もごございます。これまでのデータ、そして新たに創出されるデータを精力的に解析するこのデータベース事業の推進には、すでに着手しておるところですが今後更に全力を尽くしてまいります。

更に医療機器など、薬剤に限らずに幅広い視野で臨床研究を推進してまいることも重要と認識致しております。

そしてこのような事業を展開してゆくには、財政基盤の充実と安定が前提となることは言をまちません。多くの施設、企業、さらには公的資金の獲得も視野に入れた運営に努力を重ねてまいる所存です。

皆様のご指導、ご教示そしてご理解を賜りながら、本財団の発展、ひいては我が国のがん医療の更なる発展に微力ながら全力で寄与致したいと考えております。皆様、何卒宜しく御願ひ申し上げます。

若手研究者への

がん研究助成を
継続したい！

未来のがん治療を変えるプロジェクト

クラウドファンディング実施中、
応援をお願いします！！

2021.11.24~2022.1.31

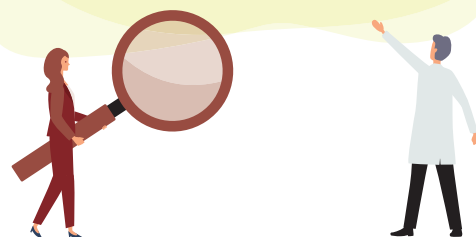


当財団へのご寄付は寄付金控除など税制上の優遇措置の対象となります。

詳細につきましては
こちらからご覧ください



<https://congrant.com/project/jfmc/3538>



「日本のがん患者さんのために、 自分の研究を少しでも前進させたい」

がん集学的治療研究財団はこれまで、将来の日本の医療を担う、多くの若手研究者の熱い想いを一般研究助成事業の形で支援してきました。

本事業は、がん治療に貢献する可能性のある研究を一般から募集し、厳正な審査の上、患者さんと社会に対する貢献度の高い研究を選考して助成金を進呈する事業です。当財団設立時から40年間以上続いており、これまで2500件以上の応募の中から、500名以上を助成して参りました。



昭和56年当時の贈呈式

実は今、本事業の継続が困難になっています

本事業は、これまで皆様のご寄付・賛助会費で運営させて頂いておりましたが、新型コロナウイルス感染禍などによって経済情勢が見通せない中、ご支援いただくことが難しくなっているのが実情です。



2018年度 研究発表会の様子

私たちは

「若手研究者への助成事業をこれからも継続したい！」と考えています

今や2人に1人が「がん」に罹患するなか、がんの研究はこれまでも、そしてこれからも変わることなく継続されなければなりません。そのためには研究に励むことのできる環境が必要です。

当財団はこれからも資金提供の形で若手研究者への支援を続けたいと考えており、このたび、皆様の御支援を募るクラウドファンディングを立ち上げました！



一般研究助成事業が継続困難の危機にあります
クラウドファンディングへの御支援をお願い申し上げます



この頁を借りて、新しいがん治療法の開発に取り組んできた若手研究者の1人を紹介いたします。
こうした若手研究者への支援を継続するために、がん集学的治療研究財団がこのたび立ち上げたクラウドファンディングに、「自身の未来に対する先行投資」として、ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

助成者の
声 第40回助成者

研究課題

肺癌における体内細菌叢間相互作用と
生物学的悪性度との関連性の解明

九州がんセンター呼吸器腫瘍科 医長
医長 庄司 文裕



研究発表会の様子

私は今、肺癌における体内細菌の影響について研究しています。

現在、世間に知れ渡っている最も有名な細菌は「腸内」細菌ですが、腸内の他にも人の体内には至る所に細菌が棲んでおり、人の免疫を司っているとされます。

細菌はいわゆる善玉菌・悪玉菌・日和見菌から構成され、菌の数や種類のバランス(多様性)を取りながら存在しています。そして、何らかの原因でこのバランスが崩れる(ディスバイオシス)と、様々な病気を引き起こすとされています。

口腔内や気道内あるいは肺内(空気の通り道)にも常在菌(悪さをしない細菌)が存在することがわかってきました。しかしながら、このような細菌が喫煙・大気汚染・ウイルス・アレルゲン・有毒物質といったものに曝露されるとディスバイオシスを生じます。その結果、様々な肺の病気(気管支喘息・慢性閉塞性肺疾患・間質性肺炎・嚢胞性肺線維症など)を引き起こす原因の一つとなることが知られるようになってきました。しかし肺癌との関連性についてはいまだ明らかになっていません。

私の研究はこうした体内細菌と肺癌の発生(発がん)やがん進行(がん悪性度獲得)との関連性を明らかにすることで肺癌の研究を違った視点から行う新規性の高い研究と考えています。この研究で肺発がんや悪性度獲得に関与する体内細菌を特定することにより、将来的に肺癌の予防・早期発見・治療に役立つものと期待しています。

現在、体内細菌研究は欧米を中心にさかんに行われており、世界中の研究者との競争でもあります。そこで、この研究をいくつかの施設と協力して行うことにより、短時間で効率よく研究を進めることが可能となり、その結果、スピーディに多くのデータを集めて解析することができます。

しかし、それには多くの研究資金が必要です。そこで私は「がん集学的治療研究財団」の助成金交付に応募しました。私の応募書類は、がん集学財団の厳正な審査を通過し、2019年(令和元年)に助成金をいただくことができました。この助成金はこの研究における中核である体内細菌の多様性解析に使用されています。そして質の高い研究成果をいち早く、世界に向けて発信したいと考えています。

がん集学的治療研究財団は、今日までに一般研究助成事業としてのべ500名以上の、私のような若手研究者に対し、6億円以上の助成を行ってきました。

しかし、現在、新型コロナウイルス感染症による影響で企業を含めた寄付事業が極度に低下し、一般研究助成事業の継続が不可能な状態に陥っています。

日本には画期的で魅力あるがん研究に取り組み、日々努力を続けている多くの若手研究者がいます。

そして適切な助成を受けることができれば、こうした研究は将来着実に実を結び、多くのがん患者さんを助けることにつながると考えます。



2020年度一般研究助成事業のご報告

昨年度は、コロナウイルスの影響により、初のハイブリット方式を一部取り入れ式典が行われることになりましたが、先生方のご協力により無事に開催をすることが出来ました。2020年度からは「がん薬物療法部門」に加え「医療機器部門」を新設し、医療環境の変化に対応させて頂きました。



2020年12月11日(金) アルカディア市ヶ谷 私学会館 阿蘇の間

第40回研究発表会

研究発表1 座長:吉野 一郎 先生

庄司 文裕
九州医療センター呼吸器外科 医長

肺癌における体内細菌叢間相互作用と生物学的悪性度との関連性の解明
-多施設共同による前向き観察研究-

高森 信吉
九州がんセンター呼吸器腫瘍科 医員

進展型小細胞肺癌患者における免疫チェックポイント阻害剤の効果予測因子としての栄養/免疫学的指標の臨床的意義に関する前向き観察研究

研究発表2 座長:馬場 秀夫 先生

岩槻 政晃
熊本大学大学院消化器外科学 助教

胃癌腫瘍微小環境における血管新生阻害剤の腫瘍免疫応答賦活化を利用した治療法の開発

廣野 誠子
和歌山県立医科大学外科学第2講座 講師

Circulating cell-free tumor DNA 解析による膀胱癌術前化学療法の効果予測

森根 裕二
徳島大学大学院医歯薬学研究所消化器・移植外科学分野 准教授

腫瘍微小環境の癌関連線維芽細胞・マクロファージをターゲットとした治療法の開発

第41回贈呈式

がん薬物療法部門

今井 克憲
熊本大学大学院 消化器外科 助教

両葉多発大腸癌肝転移に対する2期的肝切除における、腫瘍学的特性と免疫学的腫瘍微小環境の変化の検討

北沢 将人
信州大学医学部附属病院 消化器外科 講師

大腸癌におけるKRAS G12C 選択阻害剤 AMG510 の耐性シグナルの解析

富樫 庸介
千葉県がんセンター研究所 部長代理

IFN- γ シグナル異常によるがん免疫療法耐性の本態解明と克服のための新規治療開発

間野 洋平
九州がんセンター 肝胆脾外科 医師

膀胱癌関連線維芽細胞とサルコペニアとの相互作用の解明と革新的分子標的治療薬の開発

吉見 昭秀
国立がん研究センター研究所
がんRNA研究ユニット 独立ユニット長

IDH 阻害剤抵抗性白血病を克服するスプライシング阻害療法の開発

医療機器部門

豊川 剛二
九州医療センター 呼吸器外科 医師

深層学習による肺癌免疫療法の効果予測AIの開発

臨床試験の支援希望の医師・企業様へ

ニーズにあわせて、質の高い臨床試験のサポートを行っております！

当財団は40年にわたり多数の臨床試験を実施し、論文発表や学会発表に貢献してまいりました。これまでのノウハウを活かし、臨床試験にまつわる周辺業務をスポット的にサポートさせて頂く事業を開始しました。

細かな要望にも迅速にサポート

プロトコル作成支援→学会発表→論文支援までの実施組織として開始～終了までのサポートをします！

ニーズに対応した柔軟な支援が可能

- ・事務局業務のみ
- ・統計解析のみ
- ・DM業務のみ

など可能です

大手CRO (または大手CROグループ) と比較しリーズナブルに対応いたします。

これまで通り臨床試験の企画～実施～論文・学会発表までのトータル支援も行っております！

ご興味のある方は、お気軽にこちらまでご相談ください。 dm@jfmc.or.jp



現在進行中の臨床試験について



東海大学 医学部長
がん集学的治療研究財団 理事
森 正樹 先生

大津敦先生、吉野孝之先生、そして私が班長として実施したJFMC47の最終報告論文を作成することができました。参加施設の先生方にはこの場をお借りして深く御礼申し上げます。本試験は、結腸癌の術後補助化学療法3ヶ月と6ヶ月の投与期間を比較する研究で、その試験結果の素晴らしさはもちろんですが、その他に3つの大きな意義をもたらしました。一つ目は本邦の術後補助療法におけるオキサリプラチンの使用法が明確になったことです。この試験が開始された当時の日本では、術後補助療法へのオキサリプラチン併用に懐疑的な意見も聞かれました。しかし今ではガイドラインが改訂され広く受け入れられるようになりました。二つ目は国際的な取り組みであるIDEA collaborationの一部として、海外の研究者と一緒に研究を行ったことです。この結果はIDEAのdata baseに統合され、今後さまざまな解析が行われます。このような取り組みは消化器分野では初めてだと思います。そして三つ目は日本の臨床試験データが、海外のそれに比して質が高いことが示されたことです。これは日々の忙しい臨床中でも日本の研究者とデータセンターが丁寧に研究に取り組んだためだと思います。この研究をきっかけに日本の臨床研究データが海外に信用されるようになったと言っても過言ではありません。

これから活躍される先生方には、日本で行われた臨床研究の質の高さに誇りを持ち、さらにレベルの高い臨床研究を開発して欲しいと願っています。

臨床試験研究課題および集積・追跡状況一覧

1. 最終報告書作成中の研究課題

JFMC	研究課題			研究代表者
34	ホルモン陽性 Stage II, III A, 閉経後乳癌に対するエキセメスタン24週間術前治療の有用性の検討 (臨床第II相試験)			戸井 雅和
	集積期間:2006.3 -2007.12	追跡期間:~ 2018.8	論文作成中	
37 付随研究	結腸癌術後治癒切除例に対する術後補助化学療法としてのカベシタピン投与期間延長によるHRQOLおよび医療経済性への影響の調査			福田 敬
	集積期間:2009.1-2009.12	調査期間:~ 2014.12	論文投稿中	
41 付随研究	Stage II / Stage III 結腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法としてのmFOLFOX6療法の認容性に関する検討ーオキサリプラチンの安全性指標に関する策定研究ー			大津 敦 渡邊 聡明
	集積期間:2011.1-2012.12		論文作成中	
44	治癒切除不能な進行・再発胃癌症例におけるHER2の検討 -観察研究-			吉田 和弘
	集積期間:2011.9-2012.6	追跡期間:最終症例登録から3年後	論文作成中	
47 (ACHIEVE Trial)	Stage III 結腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法としてのmFOLFOX6療法またはXELOX療法における5-FU系抗がん剤およびオキサリプラチンの至適投与期間に関するランダム化第III相比較臨床試験			森 正樹 大津 敦 吉野 孝之
	集積期間:2012.8-2014.6	追跡期間:~ 2020.6	論文投稿中	
47 付随研究	Stage III 結腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法としてのmFOLFOX6療法またはXELOX療法における5-FU系抗がん剤およびオキサリプラチンの至適投与期間に関するランダム化第III相比較臨床試験 付随研究			森 正樹 大津 敦 吉野 孝之
	集積期間:2012.8-2014.12		893例 集積完了	
50	ロンサーフ (TFTD) 使用症例の後ろ向き観察 (コホート) 研究			沖 英次 山崎 健太郎
	集積期間:2017.6-2017.11		論文作成中	

2. 現在、症例集積中・追跡中研究課題

46	再発危険因子を有するStage II大腸癌に対するUFT/LV療法の臨床的有用性に関する研究			貞廣 荘太郎
	集積期間:2012.5-2016.4	追跡期間:~2021.4	追跡中 (1938例集積完了)	
48 (ACHIEVE-2 Trial)	再発危険因子を有するハイリスクStage II結腸がん治癒切除例に対する術後補助化学療法としてのmFOLF OX6療法またはXELOX療法の至適投与期間に関するランダム化第III相比較臨床試験			前原 喜彦 大津 敦 吉野 孝之
	集積期間:2014.2-2017.1	追跡期間:~2024.1	追跡中 (525例集積完了)	

学会発表について

海外

<p>1. ESMO2020 Virtual</p> <p>[JFMC46-1201] A prospective controlled trial of the efficacy of uracil and tegafur/leucovorin for stage II colon cancer with risk factors for recurrence using propensity score based methods (JFMC46 1201) Takao Takahashi, et al.</p>	<p>6.ASCO-GI 2021 Virtual</p> <p>[JFMC47-1202-C3] [JFMC48-1301-C4] Clinicopathological characteristics and impact on efficacy of 3 versus 6 months of adjuvant chemotherapy in early onset colon cancer: ACHIEVE and ACHIEVE-2 Trials Eiji Oki, et al.</p>
<p>2. ESMO2020 Virtual</p> <p>[JFMC46-1201] Risk factors for recurrence in patients with high-risk stage II colon cancer after curative resection (JFMC46-1201) Hiroki Ohge, et al.</p>	<p>7. ASCO2020 Virtual</p> <p>[JFMC48-1301-C4] Impact of High-Risk Features on Disease-Free Survival (DFS) in Patients with High-Risk Stage II Colon Cancer in ACHIEVE-2 Trial as part of the IDEA Collaboration Dai Manaka, et al.</p>
<p>3. ASCO2020 Virtual</p> <p>[JFMC47-1202-C3] Association of Post operative Serum Carcinoembryonic Antigen (CEA) with Disease free Survival in Patients with Stage 3 Colon Cancer:ACHIEVE Phase 3 Randomized Clinical Trial Masahito Kotaka, et al.</p>	<p>8. ESMO2020 Virtual</p> <p>[JFMC48-1301-C4] Long-term effect of peripheral sensory neuropathy (PSN) of 3 or 6 months oxaliplatin-based adjuvant chemotherapy for high-risk stage II colon cancer : ACHIEVE-2 as part of the IDEA Collaboration M. Kotaka, et al.</p>
<p>4. ESMO2020 Virtual</p> <p>[JFMC47-1202-C3] OS and long-term DFS with 3- vs. 6-month adjuvant oxaliplatin and fluoropyrimidine-based therapy for stage III colon cancer patients: A randomized phase 3 ACHIEVE trial T. Yoshino, et al.</p>	<p>9. ESMO2020 Virtual</p> <p>[JFMC48-1301-C4] Prognostic Effect of Postoperative Serum Carcinoembryonic Antigen (CEA) Combined with T4 versus T3 Tumors in Patients with High-Risk Stage 2 Colon Cancer: ACHIEVE-2 Phase 3 Randomized Clinical Trial A. Shiomi, et al.</p>
<p>5. WCGC2020 Virtual</p> <p>[JFMC47-1202-C3] [JFMC48-1301-C4] Relative Impact of T4 and N2 on the Efficacy of 3 versus 6 Months of Adjuvant CAPOX for High Risk Stage II and Stage III Colon Cancer:ACHIEVE and ACHIEVE 2 Trials Takeharu Yamanaka, et al.</p>	<p>10. ESMO2020 Virtual</p> <p>[JFMC49-1601-C5] Effects of elemental diet for gastrointestinal adverse events in patients with esophageal cancer receiving Docetaxel/Cisplatin/5-Fluorouracil (EPOC 2 study: JFMC49-1601-C5) : A phase III randomized controlled trial Hiroya Takeuchi, et al.</p>

国内

<p>1. 第58回日本癌治療学会 京都</p> <p>[JFMC47-1202-C3] Association of post-operative serum carcinoembryonic antigen (CEA) with disease-free survival in patients with stage 3 colon cancer: ACHIEVE Phase 3 Randomized Clinical Trial Masahito Kotaka, et al.</p>	<p>5. 第58回日本癌治療学会 京都</p> <p>[JFMC48-1301-C4] Impact of High-Risk Features on Disease-Free Survival (DFS) in Patients with High-Risk Stage II Colon Cancer in ACHIEVE-2 Trial as part of the IDEA Collaboration Dai Manaka, et al.</p>
<p>2. 第58回日本癌治療学会 京都</p> <p>[JFMC47-1202-C3] OS and long-term DFS with 3- vs. 6-month adjuvant oxaliplatin and fluoropyrimidine-based therapy for stage III colon cancer patients: A randomized phase 3 ACHIEVE trial T. Yoshino, et al.</p>	<p>6. 第58回日本癌治療学会 京都</p> <p>[JFMC48-1301-C4] Long-term effect of peripheral sensory neuropathy (PSN) of 3 or 6 months oxaliplatin-based adjuvant chemotherapy for high-risk stage II colon cancer : ACHIEVE-2 as part of the IDEA Collaboration M. Kotaka, et al.</p>
<p>3. 第58回日本癌治療学会 京都</p> <p>[JFMC47-1202-C3] [JFMC48-1301-C4] Relative Impact of T4 and N2 on the Efficacy of 3 versus 6 Months of Adjuvant CAPOX for High-Risk Stage II and Stage III Colon Cancer:ACHIEVE and ACHIEVE-2 Trials Takeharu Yamanaka, et al.</p>	<p>7. 第58回日本癌治療学会 京都</p> <p>[JFMC48-1301-C4] Prognostic Effect of Postoperative Serum Carcinoembryonic Antigen (CEA) Combined with T4 versus T3 Tumors in Patients with High-Risk Stage 2 Colon Cancer: ACHIEVE-2 Phase 3 Randomized Clinical Trial A. Shiomi, et al.</p>
<p>4. 第18回日本臨床腫瘍学会学術集会 京都</p> <p>[JFMC47-1202-C3] [JFMC48-1301-C4] Characteristics and impact on efficacy of 3 vs. 6 months of adjuvant chemotherapy in early onset colon cancer Eiji Oki, et al.</p>	<p>8. 第58回日本癌治療学会 京都</p> <p>[JFMC49-1601-C5] A phase III randomized controlled trial to demonstrate the effects of elemental diet for adverse events in esophageal cancer patients receiving Docetaxel/Cisplatin/5-Fluorouracil (EPOC 2 study: JFMC49-1601-C5) Nakashima Yuichiro, et al.</p>
	<p>9. 第107回日本消化器病学会総会 東京</p> <p>[JFMC51-1702-C7] JFMC51 : 切除不能大腸癌標準治療不応例に対する FTD/TPI+BEV 併用療法の第II相試験(最終報告) Akitaka Makiyama, et al.</p>

第58回日本癌治療学会「最優秀演題受賞」

静岡県立静岡がんセンター

大腸外科部長 塩見 明生



この度、2020年10月に京都で開催された第58回日本癌治療学会学術集会において、ACHIEVE - 2試験 (JFMC48試験) の副次研究に関して、プレナリーセッションで発表する機会を頂戴し、最優秀演題賞に採択して頂きましたのでご報告いたします。

今回、高リスクStage 2結腸癌において、術後の血清癌胎児性抗原 (CEA) と予後の関連を明らかにするため、ACHIEVE - 2試験に登録された514例を対象としてpost hoc解析を実施しました。結果は、T3N0腫瘍サブグループ (n=330) では、CEA ≥ 5 ng/mL群における3年DFS率は、CEA < 5 ng/mL群に比べて有意に低下していました (84% 対95%, HR 2.83, 95% CI 1.04 - 7.75, P = 0.0342)。一方、T4N0腫瘍サブグループ (n = 184) においては、CEA ≥ 5 ng / mL群とCEA < 5 ng / mL群で有意な差は認めませんでした。術後血清CEAは、T3N0腫瘍における予後因子であるにもかかわらず、T4N0腫瘍では関連が認められないことは、予後因子としてのCEAの影響がT4N0腫瘍のなんらかの特性 (マイクロサテライト不安定性など) により弱められた可能性があるかと考察しました。

今回の研究にあたって、先行して公表されたJFMC47試験対象であるStage 3結腸癌において、CEAは強い予後規定因子となったにも関わらず (佐野病院消化器がんセンター 小高雅人先生@ASCO2020 #4069)、我々の対象のStage2全体では相反する結果になったことへの考察に大変苦労したことを思い出します。抄録作成段階では、結果の解釈に関して、休日にも関わらず、山中竹春先生、吉野孝之先生と、一日何十ものメールをやり取りしていただきました。その中で、追加解析のリクエストがいくつもなされ、それに対し、JFMC事務局統計担当の武藤賢さんが、その都度、緻密な解析を本当に迅速に返してくださいました。そして、最終結論の合意には、早朝から全員でZoomミーティングを行い、吉野先生、山中先生から「よし、これで行ける!」と言っていただいた時の喜びは、いまでも思い出されます。世の中はコロナ禍真っ只中でしたが、関係者の皆さまの熱意は全く影響されず、むしろ、コロナ対策として我々が培ったリモート力が存分に発揮されたと感じました。

「適切に計画された試験の、信頼できるデータだから、かならずその解析結果に何らかの意味が見いだせるはずだ」という、研究者の臨床試験にかける強い思いを実感しました。

最後になりますが、JFMC48試験に関わっていただいた全ての関係者の皆様に、心から敬意を評し御礼申し上げます。

第58回癌治療学会での発表を終えて

九州がんセンター

消化管外科 中島 雄一郎



2020年10月24日に京都にて開催されました第58回日本癌治療学会学術集会において、「食道癌患者へのDCF療法時における成分栄養剤の口腔粘膜抑制作用の検討—エレンタール®非投与群を対照群としたランダム化第Ⅲ相比較臨床試験」(EPOC2study, JFMC49-1601-C5)の発表の機会を頂戴しましたので報告させていただきます。

食道癌に対する化学療法として汎用されつつあるDCF (ドセタキセル/シスプラチン/5-FU) 療法は、従来の標準的なレジメである5-FU/シスプラチン療法に比較して、消化器毒性や血液毒性などの有害事象の発現割合が高いことが懸念されています。特に口腔粘膜炎は患者のQOLを著しく損なうのみならず免疫栄養状態にも悪影響を及ぼす可能性があり、実臨床においてもその予防策が重要視されています。本試験では成分栄養剤であるエレンタールの食道癌DCF療法中における口腔粘膜炎の抑制効果が示され、食道癌領域における意義深いエビデンスが創出されたと考えております。

例年多くの参加者で賑わう癌治療学会学術集会ですが、2020年は新型コロナウイルス感染症への対策としてハイブリッド形式でのミニマムな形態の学術集会となりました。そのような状況ではありましたが、プレナリーセッションの発表会場には比較的多数の方々にご臨席いただきました。本発表以外にもがん集学的治療研究財団よりご支援いただいた演題が最優秀演題賞を獲得されており、本邦のがん臨床研究における同財団の貢献と影響力の大きさを改めて感じる事ができました。

このたびは最優秀演題の受賞ならびにプレナリーセッションでの発表という大変貴重な機会をいただきましたことを大変感謝しております。本試験の研究代表者の北川雄光先生、吉田和弘先生、プロトコール担当者の田中善宏先生、統計解析責任者の森田智視先生、そして16施設の研究参加施設の関係者の皆様、そして田中ゆかり様をはじめご支援いただいたがん集学的治療研究財団の皆様に心より御礼申し上げます。

論文発表について

<p>1. Annals of Oncology DOI: https://doi.org/10.1016/j.annonc.2020.10.480</p> <p>[JFMC48-1301-C4] Oxaliplatin-based adjuvant chemotherapy duration (3 versus 6 months) for high-risk stage II colon cancer: the randomized phase III AC HIEVE-2 trial K. Yamazaki, T. Yamanaka, M. Shiozawa, D. Manaka, M. Kotaka, M. Gamoh, A. Shiomi, A. Makiyama, Y. Munemoto, T. Rikiyama, M. Fukunaga, T. Ueki, K. Shitara, H. Shinkai, N. Tanida, E. Oki, E. Sunami, A. Ohtsu, Y. Maehara & T. Yoshino</p>	<p>3. ESMO Open DOI: https://doi.org/10.1016/j.esmooop.2021.100277</p> <p>[JFMC49-1601-C5] Effects of an elemental diet to reduce adverse events in patients with esophageal cancer receiving docetaxel/cisplatin/5-fluorouracil: a phase III randomized controlled trial – EPOC 2 (JFMC49-1601-C5) Y. Tanaka, H. Takechi, Y. Nakashima, H. Nagano, T. Ueno, K. Tomizuka, S. Morita, Y. Emi, Y. Hamai, J. Hihara, H. Saeki, E. Oki, C. Kunisaki, E. Otsuji, H. Baba, H. Matsubara, Y. Maehara, Y. Kitagawa, K. Yoshida</p>
<p>2. ESMO Open DOI: https://doi.org/10.1016/j.esmooop.2021.100093</p> <p>[JFMC51-1702-C7] Phase II study of trifluridine/tipiracil plus bevacizumab by RAS mutation status in patients with metastatic colorectal cancer refractory to standard therapies: JFMC51-1702-C7 T. Takahashi, K. Yamazaki, E. Oki, M. Shiozawa, K. Mitsugi, A. Makiyama, M. Nakamura, H. Ojima, Y. Kagawa, N. Matsushashi, H. Okuda, M. Asayama, Y. Yuasa, Y. Shimada, D. Manaka, J. Watanabe, K. Oba, T. Yoshino, K. Yoshida & Y. Maehara</p>	<p>4. Annals of Oncology DOI: https://doi.org/10.1016/j.annonc.2021.08.1745org/10</p> <p>[JFMC41-1001-C2] Large-Scale Prospective Genome-Wide Association Study of Oxaliplatin in Stage II/III Colon Cancer and Neuropathy M. Kanai, T. Kawaguchi, M. Kotaka, D. Manaka, J. Hasegawa, A. Takagane, Y. Munemoto, T. Kato, T. Eto, T. Touyama, T. Matsui, K. Shinozaki, S. Matsumoto, T. Mizushima, M. Mori, J. Sakamoto, A. Ohtsu, T. Yoshino, S. Saji, F. Matsuda</p>

JFMC データベース支援事業

当財団では、主に胃癌や大腸癌、その他乳癌や肺癌に関する多くの大規模臨床試験を実施してきており、全国約600施設以上の施設で、延べ37,000例以上の臨床研究を実施してきました。これら蓄積された臨床データの中から、手始めに大腸癌術後補助化学療法に関する臨床試験で収集した約1万例のデータベース（以下DB）を構築いたしました。このDBは、複数の補助化学療法の臨床データを集約・解析することにより、有効性、安全性の面から新たな知見を得、今後の大腸がん治療に生かすことを目的としています。財団とその関係医師のみならず、広く一般に利用可能な臨床試験情報のDBとして発展させていく予定です。本DB構築に際しては皆様からのご賛同ご支援を頂いただけではなく、その有用性が厚生労働省に認められ、平成30年度の「臨床効果データベース整備事業」として採択され、補助金を得ております。

2020年にはDB解析の専門家の先生方にお集まりいただき、DB事業支援委員会を発足させました。DB委員会では、DBを用いた研究の公募を行い、6つの有意な臨床研究を採択致しました。これらの研究成果は、順次論文発表してゆく予定です。また今後は、2020年以降に終了した臨床研究や現在実施中の臨床研究をこのDBに加え、DB自体の価値を高めていくとともに、がん患者様のための情報発信を目指して事業を進めて行く予定です。

医療機器事業

一般社団法人日本医工ものづくりコモンズと連携し、新たな臨床的価値を共創し、全国の医療機関・医療従事者のネットワークを活かし、技術シーズと医療ニーズを反映させた医療機器開発の支援を行っております！

市販後調査

自社の情報収集・解析活動に満足しておりますか？

販売前の臨床試験では得られなかった製造販売後の情報収集、品質、有効性および安全性の確保の調査を、スケジュールに合わせ迅速に対応いたします。本財団の医療機関のネットワークを活用し、登録システム、データベース、解析などのご相談にも応じます。

試作品評価

適切な臨床ニーズ・シーズ、医療現場の要望を収集し、自社の製品開発、改良、PDCA活動に活用できていますか？

自社が保有する製品、開発・改良途上にあるシーズ及びアイデアと医療現場を繋ぐお手伝いを致します。医療者・専門家が貴社の製品、シーズ及びアイデアを確認・評価（有効性、安全性、操作性、既製品との比較等）を実施し、評価結果と助言をご依頼者様のご要望に寄り添った価格でご提供致します。

医療機器事業お問合せ
md@jfmc.or.jp



詳細はこちらをご覧ください

今後の医療機器事業の事業拡大・ヘルスケアの重要性：出口を見据えた入口戦略



日本医工ものづくりコモンズ理事長
がん集学的治療研究財団 理事

谷下一夫先生

従来医療機器は、輸入超過で推移しておりましたが、2019年のデータでも依然として輸入超過が続いております。残念ながら、日本のものづくり技術が、医療機器開発に十分に活かされていない状態です。一方、2015年に発足しました日本医療研究開発機構（AMED）や地方自治体では、国産の医療機器開発を支援すべく様々な公的資金が提供されて、既に一部の開発事業では、上市に至っている事業もあります。最近では、米国製の手術ロボット「ダヴィンチ」に対抗すべく日本製の手術ロボット「hinotori」が出現し、国産医療機器開発が加速されようとしています。ところで医療機器開発は、医療現場とものづくり工学現場を繋ぐ医工連携の基で達成される事は言うまでもありません。しかしながら、分野間の壁が厚い我が国では、医療現場の情報、ものづくり現場に伝わりにくく、医療現場でのユーザビリティの欠落したデバイスを開発する事例が、過去に多く見られております。従って、医療機器開発を成功させるためには、医療現場の情報を、ものづくり現場に円滑に伝える医工連携の仕組みが必須となります。最近では、AMEDや東京都を含む全国的な地域で、医工連携を促進する動きが顕著になりつつあり、医療現場とものづくり現場との交流が進行し始めております。

当財団は、財団発足以来長年に渡って創業の市販後調査などの実績を有しており、日本全国の1000件の医療機関や3000名に渡る医療者とのネットワークを構築しております。医療分野との密なネットワークは、当財団の貴重なリソースであり、このリソースこそ、医療機器開発を成功させるための鍵である事は間違いありません。そこで、このリソースを、医療機器開発に生かすべく、医療機器委員会が発足して、本格的に医療機器開発を支援する活動を開始致しました。医療分野との密なネットワークを活かせる事業は、試作品評価です。試作品評価が必要である事は、漠然とは理解出来ませんが、

実は深い意味があります。試作品評価は、出口を見据えた入口戦略での重要な課題であるからです。

薬事のエキスパートである大竹正規氏（米国医療機器・IVD工業会 RAQA 委員会副委員長）は、2021年7月に開催された東京都主催の医工連携講座で、医療機器の開発には、ゴールを見据えた計画が必要で、これをリバースプランニングと呼んでおられました。即ち、開発のスタート時の段階で、出口を見据えて、入口戦略を練る事が医療機器開発の成功に繋がるわけです。ここで、ゴールとは出口とは何かと考えますと、当然医療現場での有用性であり、さらに言い換えると臨床的価値を明確にする事になります。医療現場での有用性や臨床的価値に関しては、日夜患者さんを診られており、医療現場の状況を熟知しておられる医療者の方々の見解が必要となります。そこで、当財団では、医療分野との密なネットワークを活かして、開発の初期段階での開発計画や試作品に関して、複数の医療者の方々から多面的に評価をして頂く試作品評価を行う事になりました。ここで、評価をして頂く医療者の数が、複数という点が重要です。何故なら、医療者の見解は、年齢、医療機関の種類（大学病院、一般病院など）、診療科などで異なる傾向があるからです。そこで、なるべく多くの医療者の方々の見解を伺う事が重要となります。これは、マーケティング分野で言われているテストマーケティングに相当します。テストマーケティングとは、新商品・サービスを開始する前に、試験的にユーザーに利用してもらい、ユーザーの反応や感触を見る事で、販売計画の縮小や変更を行い、大きなリスクを回避する事に繋がります。即ち、当財団が有している医療分野との密なネットワークを介して、医療機器開発の初期段階でのテストマーケティングを行う事になります。このようなテストマーケティングは、多くの医療機関や医療者とのネットワークを有している当財団だから実施出来る事であり、医療機器開発を計画実施されている企業やアカデミアの方々には、当財団のリソースを活用されて、出口を見据えた入口戦略、テストマーケティングを実行される事をお勧め致します。

市民公開講座を開催しました



「全国生活習慣病予防月間2021」第11回 市民公開講演会を開催

2/1月
2/28日

“多休”しっかり休養:からだところのリフレッシュ

今回は、新型コロナウイルス対策として、初のWEB講演会となり、2021年2月1日～2月28日迄の1か月間で、YouTube配信を行いました。当財団からは、山岸 久一理事長より、「休養でがん予防 -その免疫学的根拠-」をテーマに講演を頂き、西多 昌規先生による、休む技術-スマホ時代の仕事オフのつくりかた等をテーマにした講演のほか、総合討論では、コロナ禍に今「休養を考える」等をテーマに質疑が行われ、視聴は無料で抽選によりプレゼント企画も行われました。

講演 1 休む技術
スマホ時代の仕事オフのつくりかた

西多 昌規 先生

精神科医 早稲田大学睡眠科学研究所 所長、
同大学スポーツ科学学術院 准教授



講演 2 休養でがん予防
その免疫学的根拠

山岸 久一 先生

京都府立医科大学名誉教授(専門 消化器外科)



賛助会員のお誘いとご寄付のお願い

公益事業活動は、皆さまからのご寄付と賛助会費を頂いて運営しております！

がん集学的治療研究財団は、昭和55年(1980年)に創立以来、主体となる臨床試験の実施の他、がん研究に携わる医学関係者を対象に広く、学術研究の助成援助、活動支援、社会に向けての啓発活動など、がん治療にまつわる様々な活動を行って参りました。

がん治療の進展に今後さらなる貢献を目指し、本財団の活動のために、本財団の設立趣旨業にご理解を賜り、ご支援、ご協力を賜われれば幸いです。

皆様から寄せられた「想い」を、次のような事業で展開しています



ご寄付を頂いた方、賛助会員様には、以下のようなことを行っております。

- 各季刊誌の配布
本財団ニュース「がん治療のあゆみ(一般研究助成の研究報告書)などをご郵致致します。
- メールマガジン配信
本財団の活動報告を1カ月に1回程度、配信をいたします。
- パナー(ロゴマーク)掲載
当財団の季刊誌や当財団のホームページに貴施設のパナー(ロゴマーク)掲載をさせて頂き、ご寄付者・会員様の紹介をさせていただきます。
- イベントの参加
一般研究助成の式典、講演会などのイベントに優先的にご案内いたします。
- JFMCオリジナルノベルティの進呈
当財団の関係者のみにお渡ししております。
- 当財団との連携
プロジェクトや事業実施のパートナーとして連携いたします。

当財団へのご寄付は寄付金控除など税制上の優遇措置の対象となります。

お使いいただけるカード

カードでのご寄付が
可能となりました



ご寄付・賛助会員につ
いてはこちら



生きた証を想いとともにお返し、遺贈寄付について

遺言によって、ご自身の財産の一部またはすべてを法定相続人以外の特定の個人・団体に譲り渡すことを「遺贈」と言います。豊かな人生を次の世代に引き継ぐことで、皆さまの温かいお気持ちは世界で生き続けます。遺贈先に当財団をご指定いただければ、がん治療の未来を明るく発展させるための支援に充てられます。ご寄付の意向や詳細が決まっていなくても、お気軽にご相談ください。

READYFOR株式会社と連携しています！

当財団ではクラウドファンディングで広く知られているREADYFOR株式会社と連携しております。20年近くにわたり相続・遺言の相談にのってきた担当者が、ご相談に対応いたします。ご相談者様の全体の資産のなかでどの程度をご寄付に回すことができそうか等、関連するお悩みについても、ご相談者様と一緒に考えます。



お問い合わせ

03-5627-7593

受付時間 | 平日
10:00-17:00

がん集学財団



ご寄付者・賛助会員様のご紹介

私たちは、がん集学的治療研究財団の活動を支援しています！

<企業／病院 ご寄付者>



<企業／病院 賛助会員>



〈企業・賛助会員〉

朝日生命保険相互会社様
 エーザイ株式会社様
 オリンパス株式会社様
 キッコーマン株式会社様
 株式会社サイバーリーガルクエスト様
 サクラグローバルホールディングス株式会社様
 ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社様
 株式会社ツムラ様
 ミドリ安全株式会社様
 山下医科器械株式会社様

〈病院・賛助会員〉

今村総合病院様
 伊万里有田共立病院様
 磐田市立総合病院様
 大垣市民病院様
 九州がんセンター様
 京都第一赤十字病院様
 岐阜県立多治見病院様

岐阜市民病院様
 熊本医療センター様
 熊本赤十字病院様
 下呂市立金山病院様
 高知大学医学部附属病院様
 小牧市民病院様
 済生会西条病院様
 埼玉医科大学総合医療センター様
 佐野病院様
 静岡市立清水病院様
 島田市立総合医療センター様
 製鉄記念広畑病院様
 製鉄記念八幡病院様
 聖マリアンナ医科大学 呼吸器外科様
 聖マリアンナ医科大学 臨床腫瘍学様
 総合犬山中央病院様
 高山赤十字病院様
 千葉県がんセンター様
 千葉大学大学院医学研究院様
 津山中央病院様

豊橋医療センター様
 浜松医科大学様
 浜松医療センター様
 福岡市民病院様
 福島県立医科大学附属病院様
 福山医療センター様
 藤田医科大学病院様
 船橋市立医療センター様
 松下記念病院様
 松波総合病院様
 松山市民病院様
 吉野川医療センター様
 淀川キリスト教病院様

〈ご寄付者〉

株式会社ジュエラ様
 桑山哲也様
 藤田朋子様

ご厚志ありがとうございました



チャリティーコンサート の収益金を ご寄付いただきました!

去る2021年8月27日に、女優の藤田朋子さんとご主人であるアコーディオン奏者の桑山哲也さんが、チャリティーコンサートを開かれました。

主催であるジュエラ(株)様を通し、収益金の一部を当財団にご寄付いただきました。誠に有難うございました。

ジュエラ(株) <https://www.jewe.la/>

公益財団法人がん集学的治療研究財団 役員・評議員・委員名簿

役員・評議員

会長	
藤田 讓	朝日生命保険相互会社最高顧問
理事長	
山岸 久一	京都府立医科大学名誉教授
常務理事	
桑野 博行	地方独立行政法人福岡市立病院機構福岡市民病院院長
理事	
小寺 泰弘	名古屋大学大学院医学系研究科消化器外科学講座教授
今野 弘之	国立大学法人浜松医科大学学長
佐藤 好美	産経新聞社論説委員室論説委員
田邊 稔	東京医科歯科大学大学院肝胆膵外科学分野教授
谷下 一夫	一般社団法人日本医工ものづくりコモンズ 理事長
森 正樹	東海大学医学部長
山上 裕機	和歌山県立医科大学第2外科教授
監事	
杉原 健一	光仁会第一病院院長
松本 謙一	サクラグローバルホールディング株式会社代表取締役会長
評議員	
相羽 恵介	医療法人社団東光会戸田中央総合病院腫瘍内科部長
池田 徳彦	東京医科大学呼吸器・甲状腺外科学分野主任教授
石岡 千加史	東北大学大学院医学系研究科臨床腫瘍学分野教授
宇山 一朗	藤田医科大学先端ロボット・内視鏡手術学教授
大辻 英吾	京都府立医科大学大学院医学研究科消化器外科学教授
掛地 吉弘	神戸大学大学院医学研究科外科学講座食道胃腸外科学分野教授
北川 雄光	慶應義塾大学医学部外科学教授
坂本 純一	公立学校共済組合 東海中央病院緩和ケア内科第二緩和ケア内科部長・名誉院長
島田 光生	国立大学法人徳島大学大学院医歯薬学研究部消化器・移植外科学教授
瀬戸 泰之	東京大学大学院医学系研究科消化管外科学教授
塚田 敬義	東海国立大学機構 岐阜大学大学院医学系研究科医学系倫理・社会医学分野教授
辻 晃仁	香川大学医学部臨床腫瘍学教授
土岐 祐一郎	大阪大学大学院医学系研究科 外科学講座消化器外科学教授
平木 隆夫	岡山大学 学術研究院 医歯薬学域 放射線医学准教授
藤原 俊義	岡山大学 学術研究院 医歯薬学域 消化器外科学教授
松原 久裕	国立学校法人千葉大学大学院医学研究院長・教授
三橋 洋之	三橋産業株式会社代表取締役会長

名誉会長

茂木 友三郎 キックマン株式会社取締役名誉会長・取締役会議長

顧問

顧問	
池田 義雄	一般社団法人日本生活習慣病予防協会名誉会長
佐治 重豊	岐阜大学 名誉教授

一般研究選考委員会

委員	
掛地 吉弘	神戸大学大学院医学研究科外科学講座食道胃腸外科学分野教授
北川 雄光	慶應義塾大学医学部外科学教授

坂本 純一	公立学校共済組合 東海中央病院緩和ケア内科 第二緩和ケア内科部長・名誉院長
島田 光生	国立大学法人 徳島大学大学院医歯薬学研究部消化器・移植外科学 教授
竹之下 誠一	公立大学法人 福島県立医科大学理事長 兼 学長
馬場 秀夫	熊本大学大学院生命科学研究部消化器外科学教授・病院長・副学長
宮崎 勝	国際医療福祉大学成田病院 病院長
森 正樹	東海大学医学部長
吉野 一郎	千葉大学大学院医学研究院呼吸器病態外科学教授

臨床研究開発・推進委員会

委員長	
植竹 宏之	独立行政法人国立病院機構災害医療センター臨床研究部長
幹事会幹事	
太田 哲生	湖南学院医務課長
桑野 博行	地方独立行政法人 福岡市立病院機構 福岡市民病院 院長
今野 弘之	国立大学法人 浜松医科大学学長
瀬戸 泰之	東京大学大学院医学系研究科消化管外科学 教授
馬場 秀夫	熊本大学大学院生命科学研究部消化器外科学教授・病院長・副学長
松原 久裕	千葉大学大学院医学研究院先端応用外科学教授
吉田 和弘	岐阜大学大学院医学系研究科腫瘍外科教授

北海道・東北委員

河野 浩二	福島県立医科大学医学部消化管外科学講座主任教授
小松 嘉人	北海道大学病院腫瘍センター化学療法部部長・診療教授
神宮 啓一	東北大学大学院医学系研究科放射線腫瘍学分野教授
高畑 武功	弘前大学大学院医学研究科消化器血液内科学講座講師
武富 紹信	北海道大学大学院医学研究院消化器外科学教室I教授
竹政 伊知朗	札幌医科大学消化器・総合・乳腺・内分泌外科学講座教授
根本 建二	山形大学理事・副学長
本多 通孝	福島県立医科大学低侵襲腫瘍制御学講座教授
本間 重紀	北海道大学大学院医学研究院消化器外科学教室I講師
村田 暁彦	青森県立中央病院がん診療センター外科統括部長
結城 敏志	北海道大学病院消化器内科助教
大塚 幸喜	岩手医科大学付属病院外科学講座准教授

関東委員

青山 徹	横浜市立大学医学部医学科外科治療学講師
明石 定子	昭和大学医学部外科学講座乳腺外科学部門教授
市川 大輔	山梨大学医学部外科学講座第1教室教授
伊藤 雅昭	国立がん研究センター東病院大腸外科科長
大家 基嗣	慶應義塾大学医学部泌尿器科教授
北山 丈二	自治医科大学消化器・一般移植外科教授
絹笠 祐介	東京医科歯科大学消化管外科学分野教授
佐伯 浩司	群馬大学大学院総合外科学講座消化管外科学分野教授
櫻井 英幸	筑波大学放射線腫瘍学教授
佐藤 武郎	北里大学医学部下部消化管外科学准教授
鈴木 和浩	群馬大学大学院医学系研究科群馬大学医学部附属病院 泌尿器科教授
高張 大亮	がん研有明病院消化器化学療法科医長
多田 敬一郎	日本大学医学部外科学系乳腺内分泌外科学分野主任教授
徳永 正則	東京医科歯科大学消化管外科准教授
内藤 剛	北里大学医学部下部消化管外科学単位主任教授
古畑 智久	聖マリアンナ医科大学東横病院消化器病センター教授
堀江 重郎	順天堂大学大学院医学研究科泌尿器外科学教授

山口 研成	がん研有明病院消化器化学療法科部長
和田 則仁	湘南慶育病院 外科部長
中部委員	
上原 圭	名古屋大学医学部附属病院消化器外科一病院講師
神田 光郎	名古屋大学大学院医学系研究科消化器外科学講師
澤木 明	藤田医科大学臨床腫瘍科准教授
高橋 孝夫	岐阜大学大学院医学系研究科がん先端医療開発学講座特任教授
竹内 裕也	浜松医科大学医学部外科学第二講座教授
中山 吾郎	名古屋大学医学部附属病院消化器外科准教授
林 真也	藤田医科大学医学部放射線腫瘍科教授
室 圭	愛知県がんセンター薬物療法部副院長・薬物療法部部長
山口 和也	木沢記念病院外科副院長
山崎 健太郎	静岡県立静岡がんセンター消化器内科医長
若井 俊文	新潟大学大学院医歯学総合研究科 消化器・一般外科学分野(第一外科)教授

近畿委員	
掛地 吉弘	神戸大学大学院医学研究科外科学講座食道胃腸外科学分野教授
加藤 健志	大阪医療センター下部消化器外科科長
窪田 健	京都府立医科大学外科学教室消化器外科学部門講師
黒川 幸典	大阪大学大学院医学系研究科消化器外科学准教授
佐々木 良平	神戸大学医学部附属病院放射線腫瘍科 教授
佐藤 太郎	大阪大学大学院医学系研究科先進癌薬物療法開発学寄附講座寄附講座教授
恒藤 暁	京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻教授
中島 貴子	京都大学医学部附属病院次世代医療・iPS細胞治療研究センター教授
中森 幹人	大阪南医療センター外科消化器外科部長
西川 和宏	堺市立総合医療センター胃食道外科部長・臨床研究センター長
松田 武	神戸大学大学院医学研究科外科学講座低侵襲外科学分野特命准教授
山田 知美	大阪大学医学部附属病院未来医療開発部特任教授

中国・四国委員	
青儀 健二郎	四国がんセンター乳腺科臨床研究推進部長
大毛 宏喜	広島大学病院感染症科教授
杉山 一彦	広島大学病院がん化学療法科教授
辻 晃仁	香川大学医学部臨床腫瘍学講座教授
永坂 岳司	川崎医科大学臨床腫瘍学教室准教授
西崎 正彦	岡山大学病院消化管外科講師
裕 彰一	山口大学医学部先端がん治療開発学講座教授
檜井 孝夫	広島大学病院遺伝子診療科教授
前田 広道	高知大学医学部 外科講師

九州・沖縄委員	
相島 慎一	佐賀大学医学部病因病態科学教授
江口 晋	長崎大学大学院移植・消化器外科教授
江崎 泰斗	九州がんセンター臨床研究センター臨床研究センター長
小林 裕明	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 健康科学専攻 発生発達成育学講座 生殖病態生理学分野 教授
佐村 博範	浦添総合病院 消化器病センター外科下部消化管外科部長
徳永 えり子	九州がんセンター乳腺科部長
馬場 英司	九州大学大学院医学研究院社会環境医学講座連携社会医学分野教授
馬場 祥史	熊本大学大学院生命科学研究部次世代外科治療開発学寄附講座特任教授
吉満 研吾	福岡大学医学部放射線医学教室主任教授

臨床試験審査委員会

委員	
坂本 純一	公立学校共済組合 東海中央病院緩和ケア内科 第二緩和ケア内科部長・名誉院長
大庭 幸治	東京大学大学院情報学環准教授
木村 晋也	佐賀大学医学部内科学講座血液・呼吸器・腫瘍内科教授

辻 晃仁	香川大学医学部臨床腫瘍学教授
三嶋 秀行	愛知医科大学病院臨床腫瘍センター教授
森田 智視	京都大学大学院医学研究科医学統計生物情報学教授

医療機器委員会

委員	
谷下 一夫	一般社団法人日本医工ものづくりコムズ 理事長
柏野 聡彦	一般社団法人日本医工ものづくりコムズ副理事長
鈴木 由香	東北大学病院臨床研究推進センター国際部門部長・特任教授
昌子 久仁子	神奈川県立保健福祉大学ヘルスイノベーション研究科教授
山本 澄子	国際医療福祉大学大学院教授
和田 則仁	湘南慶育病院外科部長
顧問	
宇山 一朗	藤田医科大学先端ロボット・内視鏡手術学 教授

利益相反委員会

委員	
吉田 和弘	岐阜大学大学院医学系研究科腫瘍外科教授
梶谷 篤	梶谷総合法律事務所弁護士
矢永 勝彦	国際医療福祉大学大学院医学研究科医学部消化器外科教授

財務委員会

委員	
今野 弘之	国立大学法人浜松医科大学学長
島田 光生	国立大学法人 徳島大学大学院医歯薬学研究所消化器・移植外科学 教授
田邊 稔	東京医科歯科大学大学院肝胆脾外科学分野教授
谷下 一夫	一般社団法人日本医工ものづくりコムズ 理事長
松原 久裕	千葉大学大学院医学研究院先端応用外科学教授

データベース事業支援委員会

委員	
吉川 貴己	国立がん研究センター中央病院 胃外科科長
大庭 幸治	東京大学大学院情報学環准教授
坂本 純一	公立学校共済組合 東海中央病院緩和ケア内科 第二緩和ケア内科部長・名誉院長
青山 徹	横浜市立大学医学部外科治療学講師
柏原 康佑	東京大学医学部附属病院 臨床研究推進センター特任講師
神田 光郎	名古屋大学大学院医学系研究科消化器外科学講師
本多 通孝	福島県立医科大学低侵襲腫瘍制御学講座教授
前田 広道	高知大学医学部外科特任講師
眞柳 修平	静岡県立静岡がんセンター 食道外科医長
山田 康秀	浜松医科大学医学部臨床腫瘍学講座教授

広報委員会

委員	
佐藤 好美	産経新聞社論説委員室論説委員
天野 慎介	一般社団法人全国がん患者団体連合会理事長
田村 誠	一般社団法人医療システムプランニング代表理事

がんイベント実行委員会

委員	
飯島 高尚	株式会社ポマト・プロ代表取締役社長
遠藤 源樹	順天堂大学医学部公衆衛生学講座准教授
谷下 一夫	一般社団法人日本医工ものづくりコムズ理事長
目々澤 肇	東京都医師会理事／目々澤醫院院長



Infomation

JFMC がんイベント企画



Human

Care

Project

JFMC

がんと闘う人々を励まし勇気づけ、 がんから護るヒューマンケアプロジェクト!!

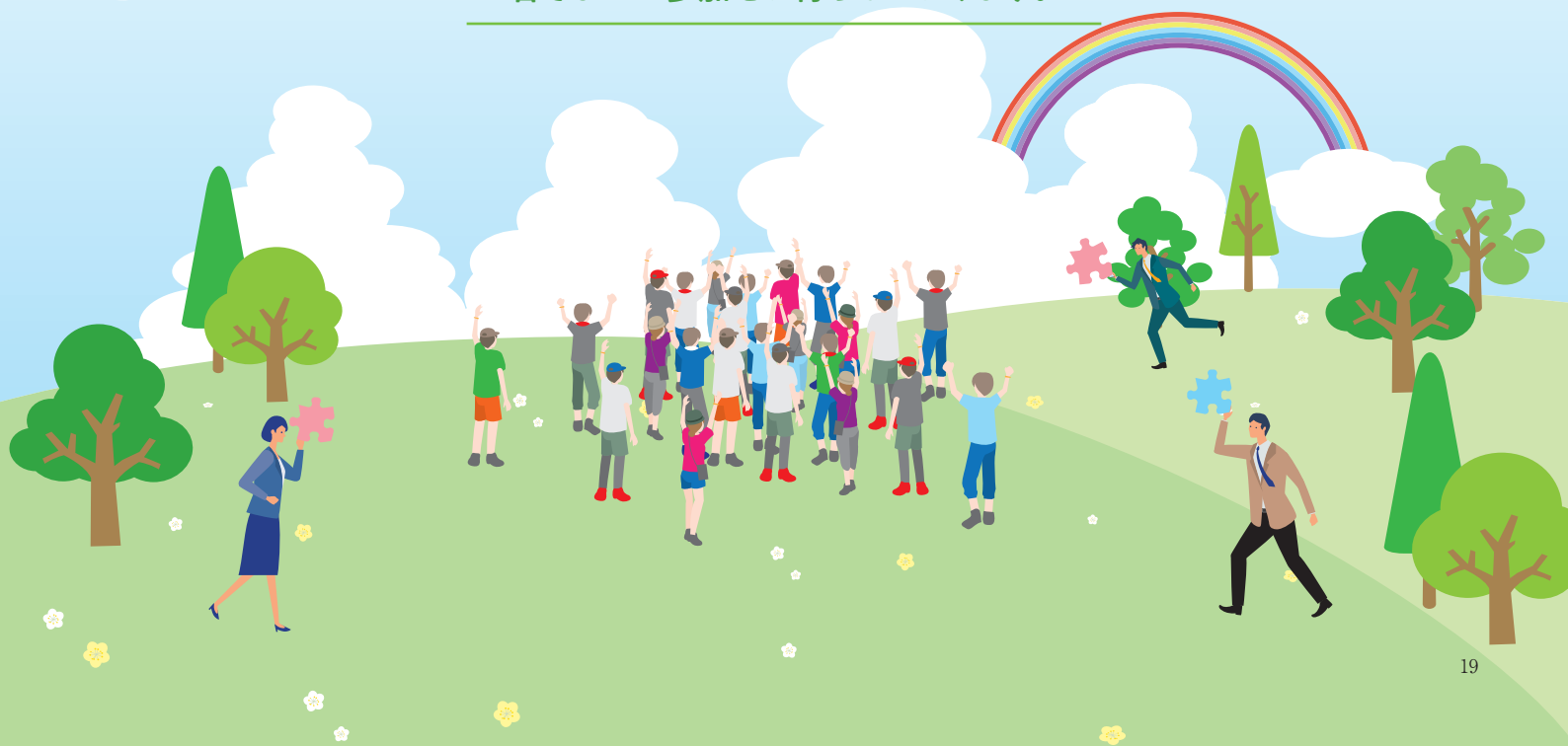


がん研究の進歩に呼応して、がん治療が大きく進歩しており、患者さんの生存率が飛躍的に向上しています。一方で、長期のがん治療を受けなくてはならない患者さんも多く、必ずしもがん治療のQOLが向上しているとは言えません。さらに、がん研究や治療法に関して、情報の洪水となっており、予防、診断治療に関する適切な判断が困難になっている面も否めません。

そこで、患者さんのみならず一般の方々が、がんという病気やがん治療を正しく理解し、予防と全人的治療に向けてがん治療の知識や経験を共有し、共にがんと闘うという意識を持つ事が必要です。がんと共に闘う人々との出会い、正しい情報共有、予防と全人的治療に向けてがんと闘う勇気を出す事を目的に、がん治療の知識や経験を共有し、孤独な治療から脱却して、共にがんと闘うという意識を持つ事が必要であります。そこで、がんと共に闘う人々との出会い、正しい情報共有、自由な意見交換を実現させる社会イベントを企画中です。

コロナウイルス感染症が早急に終息することを願い、一部のプログラムにWEBによる開催の導入を検討するなど感染防止対策を講じながら、皆さまが安心してご参加いただけるよう、開催に向けて全力で取り組んでおります。

詳細は本財団ホームページにて掲載します。
皆さまのご参加をお待ちしております。



Information

事務局インフォメーション

編集後記

新型コロナウイルスが猛威を振るった令和2年～3年、コロナ禍において本財団の公益事業である「患者さんに優しいがん治療法」の研究開発について、出来る限り分かりやすく発信するための新たな試みとして、SNS (Facebook Instagram) 開設しました(下記参照)。

同時に2021年12月よりHPをリニューアルして、事業活動をタイムリーに発信しております。

この度の「がん集学財団ニュース」は44号をむかえ、一般の皆様にもご理解を頂ける内容に刷新しております。巻頭の代表理事の挨拶にもごぞいますように公益性を保つためにも、今後は皆様からのご意見等を「がん治療法」の研究開発支援にフィードバックして行きたいと思っております。至らない点もあるかと思いますが、次年度に向けて新規事業の準備を進めて行きたいと思っております。引き続きご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。最後に、この度の「がん集学財団ニュース」作成にあたり、理事の先生方初め、皆様方にご支援を頂きまして有難うございます。この場をお借りして、御礼申し上げます(M.K)

HPリニューアルしました!

配信も始めております。メールマガジン配信中!

がん集学財団の情報発信サイト

- HP <https://www.jfmc.or.jp/>
- FB <https://www.facebook.com/JFMC.Official/>
- IG <https://www.instagram.com/jfmc.official/>

▼ホームページ



フェイスブック



インスタグラム



Access

当財団までの経路

- JR 総武線 亀戸北口より、西大島駅方向に徒歩約7分
- 都営新宿線 西大島駅A2出口より、亀戸方向に徒歩約10分



事務局内の風景

がん集学財団ニュース

2021年12月発行

発行人 山岸 久一

発行所 公益財団法人 がん集学的治療研究財団

お問い合わせは下記にお願いいたします。

〒136-0071 東京都江東区亀戸1-28-6 タニビル3階

電話 (03) 5627-7593 FAX (03) 5627-7595

メールアドレス jfmc@jfmc.or.jp ホームページ <https://www.jfmc.or.jp/>



デザイン: 有限会社ゴルゴオフィス